



▼理解されることより理解することを▼

校長 小田 恵

2022年度も2ヶ月が過ぎ、少しずつコロナ前の日常が戻りつつあります。しかし、紛争のさなかにある地域などでは、戦争状態が日常となって久しく、先の見えない状況が続いています。世の不条理に苦しむ人々のために祈りを捧げたいと思います。

さて、洛星では毎月、各学年の掲示板に聖書の言葉を掲示しています。

5月の言葉は、ローマの信徒への手紙15章2節

「おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです」

6月は、ペトロの手紙4章10節から

「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を活かして互いに仕え合いなさい。」

5・6月の言葉のメッセージとしては共通しており、いずれの言葉も、その基にはキリストの「互いに愛し合いなさい」という教えがあります。聖書にあるキリストやその弟子たちの言葉は、しばしば逆説的で、挑発的です。（このことについては次の機会ですべて述べようと思います。）5・6月の言葉は比較的穏やかでわかりやすいものですが、キリストの「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ5章44節）となるとすぐに納得できない人が多いでしょう。殊にロシアとウクライナの現在の関係において、ウクライナの人にこのキリストの言葉は感情的には受け入れられないかもしれません。

学校、または教室という小さな社会でも同様です。いきなり「隣人を喜ばせ」る、とか、「互いに仕え合」うと言われても、あまりに漠然としていて戸惑うことと思います。日常の些細な争いの中でさえ、なんであんなヤツに仕えなあかんねん！と思うのがむしろ普通でしょう。理解の助けとして、毎月掲示する聖書の言葉には簡単な説明をつけています。例えば、5月なら「自分を喜ばせるのではなく、隣人を喜ばせなさい、とパウロは言っています。相手の必要が満たされるためにはどうすればよいかを考えて、何かを話したり行なったりすることは、隣人を喜ばせていることになるのです」。6月は「神の恵みは多種多様、個性的で多彩です。自分がどんな恵みを神からいただいているかを知ることは、自分の賜物を知ることになります…（略）…弱さ・傷・病・悲しみを経験したことも神の賜物なのです」。これは生徒だけでなく、私たち大人へのメッセージでもあります。

自分が他者のために何ができるかを考えること。これは平和への一歩にもなると信じています。最後に聖フランシスコの祈りの一節を挙げて文を結びます。

「神よ、慰められることよりも慰めることが、理解されることよりも理解することが、愛されることよりも愛することができるようにさせてください」